

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03279

研究課題名（和文）アフリカ諸国における独立記念式典の変容過程に関する民族学的研究

研究課題名（英文）Ethnological Study of the Transformation of the Process of Independence Day in Africa

研究代表者

阿久津 昌三（Akutsu, Shozo）

信州大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：30201883

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本調査研究は、アフリカ諸国における独立記念式典の変容過程に関する民族学的研究と題して、特にガーナ共和国の事例をもとに、独立記念式典の変容過程を明らかにしたものである。ナショナルデーは国家の「過去」を想起し、再集団化あるいは再演出、再提示、または再定義したりする。ナショナルデーは国家のアイデンティティを強化する機能をはたしている。独立記念式典の変容過程について大統領のガバナスと政権交代のなかで検討した。独立記念式典の変容過程は「政権交代の力学」と「モニュメント」という座標軸でみるとはっきりと理解することができる。ンクルマの銅像の処遇を「記憶と忘却の歴史」のなかで明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本調査研究は、西アフリカ、ガーナ共和国において継続的に探究している研究をさらに前進・深化させるものである。アフリカの諸国の独立記念式典の様態を明らかにするだけでなく、偏狭なナショナリズム形成に結びついているか否か、またより開かれた個性とアイデンティティを育むものなのか否か、独立記念式典を介した集団のアイデンティティのあり方の解明に寄与した。それは、新しい人類学の地平を開くことに貢献するものとなる。

研究成果の概要（英文）：In this study the researcher examined the transformation of the process of independence day in Africa, in particular, the Republic of Ghana. This study assumed that national days are commemorative devices in time and space for reinforcing national identity. National days seem to be subject to consensus and integration; competition and conflict; invention and reinvention; remembering and forgetting. Remembering independence, in state as well as non-state constructions, connects to changing contemporary purposes and competing political regimes.

研究分野：文化人類学

キーワード：アフリカ ガーナ 独立記念式典 ナショナルデー 国家のアイデンティティ 政権交代 モニュメント クワメ・ンクルマ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1957年3月6日、ガーナの独立式典には、世界各国の著名人たちが出席した。ニクソン、キング牧師、ジャズ奏者のアームストロング夫人などが出席している。ガーナの独立式典は、1947年のインド独立式典で採用された形式になって、深夜零時きっかりに、最後のイギリスの国旗がヨーク公爵夫人の前で「葬送喇叭」にあわせて降ろされた。これは「帝国の終焉」を象徴するものであった。スーダン、ガーナにナイジェリア、シエラレオネに。そしてケニア、ウガンダに、タンガニーカ。さらに北ローデシアに、ニアサランド。旧英領の植民地は一つずつ独立していき、その名前の点呼は「帝国の死」を告げる鐘のようであったと語られている。アフリカ諸国は、希望に満ちた前途を踏みだしたはずだった。だが独立以後、約60年の歳月のなかで、順調に国づくりを進めている国もあれば、政府の過ちのために国づくりに失敗したり、停滞の袋小路に落ちこんだりしている国があるのが現実である。

2. 研究の目的

本調査研究は、独立60周年を迎えようとしているアフリカ諸国を対象として独立記念式典の変容過程を明らかにすることが目的である。特に、2017年3月6日に独立60周年を迎える西アフリカのガーナ共和国の事例をとりあげることによって独立記念式典の変容過程を明らかにする。また、本調査研究は、旧英領アフリカ諸国をとりあげ、ナショナルデイとして実施されている「独立記念式典」を重点的に分析することによって「大統領のページェント」を明らかにすることが目的である。

3. 研究の方法

本調査研究は、第1年度(2017年度)から第3年度(2019年度)までの3年計画で実施した。本調査研究は、3年間で調査研究を完結するために、1981年以来約38年間継続して調査研究に従事している西アフリカのガーナ共和国の事例を中心に実施した。また、西アフリカ(ナイジェリア、リベリア)、東アフリカ(ケニア、ウガンダ、タンザニア)、中央アフリカ(ザンビア、コンゴ民主)、南部アフリカ(ボツワナ、ジンバブエ、南アフリカ)の独立記念式典の事例と比較検討を行なった。

第1年度(2017年度)は海外及び国内において調査研究を実施した。海外における主たる渡航先は連合王国及びガーナ共和国であり、現地研究拠点機関を中心に調査研究を実施した。連合王国では、アフリカ諸国の独立記念式典に関する資料収集及び情報収集をケンブリッジ大学図書館及びアフリカ研究所で行なった。ガーナ共和国では、ガーナ大学アフリカ研究所、国立博物館、W・E・B・デュボイスセンター及びクワメ・ンクルマ聖廟博物館等で資料収集及び情報収集を行なった。また、クマシの王宮博物館で資料収集及び情報収集を行なったとともに公開のワークショップ「文化遺産の守り手としての博物館」において「My Beloved Asante and Museums in Ghana」として講演を行なった。これは基盤研究(A)「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」(研究代表者 吉田憲司国立民族学博物館教授)との連携によるものである。さらに、エルミナ、ケープコーストにおいてクワメ・ンクルマに関わる独立運動関係資料収集及び情報収集を行なった。国内の調査研究では、アフリカ諸国の独立記念式典に関する資料収集及び情報収集を行なった。

第2年度(2018年度)は海外及び国内において調査研究を実施した。主たる渡航先は連合王国及びガーナ共和国であり、現地研究拠点機関を中心に調査研究を実施した。連合王国では、アフリカ諸国の独立記念式典に関する資料収集及び情報収集をケンブリッジ大学図書館及びアフリカ研究所で行なった。ガーナ共和国では、ガーナ大学アフリカ研究所及びクマシの王宮博物館

で資料収集を行なった。特に、アフリカ研究所の民族音楽学で著名な J・H・K・ンケティア・アーカイブ資料(演説、ハイレイフ音楽等)の予備調査を行なった。国内の調査研究では、アフリカ諸国の独立記念式典に関する資料収集及び情報収集を行なった。具体的には、ガーナの独立記念式典の象徴論/権力論的分析(国旗、国歌、銅像・戦没者慰霊碑、議事堂、貨幣、郵便切手等のナショナル・シンボル)、ガーナの都市構造と独立記念碑の地政学的分析(ガーナの指導者たちの銅像及びストリートの名称等のナショナル・シンボル)、独立記念式典の意見交換及び情報交換、アフリカ諸国独立 60 周年に関する資料収集である。

第3年度(2019年度)は海外及び国内において調査研究を実施した。海外における主たる渡航先は連合王国であり、現地研究拠点機関を中心に調査研究を実施した。連合王国では、アフリカ諸国の独立記念式典に関する資料収集及び情報収集をケンブリッジ大学図書館及びアフリカ研究所で行なった。国内の調査研究では、アフリカ諸国の独立記念式典に関する資料収集及び情報収集を行なった。

4. 研究成果

ガーナの独立式典の映像をもとに詳細に分析した。独立式典の映像を見ると、アーデン＝クラーク総督の華麗なる衣装、ケント公爵夫人とダンスをするンクルマ、国旗の掲揚、国歌の斉唱、鼓笛隊と軍隊の行進、民族の踊り、ミス・コンテスト、競艇と競馬、アフリカに船で戻ってきた人々(まるで奴隷交易の逆ルート)(The Door of No Return)、ハイレイフ音楽の演奏、戦没者の追悼、立法議会の閉幕と国民議会の開幕、花火の打ち上げなどの場面がみられる。これは「帝国の終焉」を意味した。また、クワメ・ンクルマによる6分56秒にわたる独立式典のスピーチをとりあげ、アリストテレスの『弁論術』などを参照体系として、話題となる素材の「発見」

見いだされた素材の「配列」(序論/陳述/論証/結論、過去/現在/未来)、一つの文体としての形づくる「修辞」(対比する/繰り返す/意味をずらす/度数をずらす)、表現の「記憶」

口頭で表出する「実演」、説得の諸手段(エトス、パトス、ロゴス)の項目毎にどのようなレトリックが使われているのかを分析した。さらに、ガーナ大学アフリカ研究所で所蔵されている J・H・K・ンケティア・アーカイブ資料(音声資料)とともに『クワメ・ンクルマ演説集』(全5巻)を収集してンクルマ演説の「コーパス分析」を行なった。

ナショナルデイは国家の「過去」を想起し、再集団化(re-member)あるいは再演出(re-enact)、再提示(re-present)または再定義(re-define)したりする。ナショナルデイは公衆や国際的な聴衆の参加を得て、国家に対する情緒的な愛着(ナショナリズム)を昂揚させる機能をはたしている。また、ナショナルデイは国民と国家との関係を具象化し、国家を記念するために独特な公的な祝祭性をともなって表現される。つまり、ナショナルデイは「想像の共同体」(ベネディクト・アンダーソン)を演出する儀式をともなう。

ナショナルデイは強権的政治体制のなかで両極の軸を絶えず変動している。また、ガーナの独立記念式典は、現在、ロンドン、ベルリン、ニューヨーク、東京などのディアスポラにとって集団形成とナショナル・アイデンティティの「結衆」の原点となっている。新型コロナウイルスの感染拡大で ZOOM などによるオンライン会議が実施されるようになったが、独立記念式典のみならず結婚式や葬儀なども「新しい生活様式」としてオンラインが導入されることが予想される。コロナ後の独立記念式典の在り方を問うことは極めて重要である。

2007年3月6日にはガーナの独立50周年記念式典が各地で盛大に開催された。ビッグ・シックスの国民的英雄が祀りあげられた。ンクルマとダンクァとの対立関係があった C P P と U G C C との儀礼上の「統合」と「和解」と見ることができる。これはモニュメントや紙幣の発行な

どに象徴的にみられる。また、ンクルマの政治的体は、亡命先のギニアのコナクリで埋葬され、ブシア政権の崩壊とともに生地のコナクリ村に戻され再埋葬、さらにアクラのポロ広場に再々埋葬された。ンクルマの名誉剥奪と名誉回復のドラマは遺体とその葬儀（また、銅像の処遇）にみることができる。また、ガーナの独立 60 周年にはクエギル・アグレイの記念紙幣が発行された。独立記念式典の変容過程は「政権交代の力学」と「モニュメント」という座標軸で見るとはっきりと理解することができる。筆者も、ガーナにおいて国旗・国歌・銅像・戦没者慰霊碑・議事堂・紙幣・貨幣・郵便切手等の象徴論・権力論的分析、指導者たちの銅像、博物館の展示及びストリートの名称等の都市構造と独立記念碑の地政学的分析を行なった。

1957 年 3 月 6 日にイギリスから独立をはたしンクルマが首相に就任した。1958 年 3 月の独立 1 周年記念にはンクルマ銅像の除幕式が行なわれた。この銅像は独立前に発注されていたものでイタリアの彫刻家ニコラ・キャタデーラの作品である。1960 年 7 月にガーナは「共和制 (republic)」に移行しンクルマは大統領に就任した（第 1 共和制）。

1966 年 2 月にホーチミン大統領の招きでベトナムに向かったンクルマは、途上の北京で、本国のクーデタを知った。約 10 日後の 3 月 6 日には独立 9 周年記念式典が予定されていた。ンクルマの銅像が倒されて小さな子どもたちが遊んでいる写真は世界に広く報道された。この銅像の破壊はンクルマ政権の崩壊を象徴するものであった。銅像の倒壊と手や首の切断という野蛮な行為（ヴァンダリズム）はンクルマ政権の終焉を象徴的に表現するものであり、レーニン像の倒壊と同様に、その破壊はンクルマにその汚名を着せ、あるいはそれらに込められた記憶を抹殺しようとする行為と読みとることができる。これに対して、ンクルマはヨーロッパ列強の新聞に掲載された「写真」をとりあげ政権が終わりを告げたかのように意図的に報道していると帝国主義批判している。国歌もクーデタの 1 年後の革命記念日に新しい歌詞に変更された。国家解放評議会（NL C）の軍事政権は 1969 年 9 月まで続いた。10 月にブシア政権に民政移管して第 2 共和制が成立した。ブシア政権はダンクァ（UG C C）の国民解放運動（NL）の流れを汲む進歩党（PP）を組織して、反ンクルマ（CP P）の政策を打ち出した。しかしながら、ブシアの政策は理想主義を掲げたが経済危機を打開することはできなかった。

1972 年 1 月にアチャンポン大佐によるクーデタによってブシア政権が転覆する。しかし、ンクルマは同年 4 月 27 日にルーマニアの病院で死去している。アチャンポン大佐は親ンクルマの立場をとり、ンクルマの遺体をギニアのコナクリから生地のコナクリ村にもどし再埋葬した。また、同年、ンクルマ銅像も修復されて議事堂前に建築された。さらに、1975 年にンクルマの生家が改装されて聖地化されることになった。ンクルマの名誉回復が図られたのである（しかし、これも 2007 年の 50 周年のときに争点となる）。国家救済評議会（NR C）の軍事政権は 1975 年 10 月まで続き、最高軍事評議会（SM C）に再編されて 1979 年 6 月まで続いた。しかし軍部では幹部に対する不満が鬱積することになった。待遇と昇進の問題である。

1979 年 6 月に青年将校ローリングス空軍大尉によるクーデタが起り、NR C 及び SM C の指導者たちが処刑された。アクフォ将軍が外交に出かけるときローリングス空軍大尉指揮する閲兵式の場面は写真で見るととても印象的である。1979 年 9 月に民政移管しリマン政権が成立する（第 3 共和制）。しかし、1981 年 12 月 31 日にローリングス空軍大尉によるクーデタが再び起きる。リマン政権が崩壊する。暫定国家防衛評議会（PN DC）は 1993 年 1 月まで約 12 年間続くことになる。1983 年頃から、国際通貨基金、世界銀行が勧告する構造調整政策を実施し、西側諸国の援助を受けて経済面で成功をおさめた。ローリングスは「構造調整の優等生」ともよばれた。1987 年にはブルキナファソのサンカラ大統領の暗殺を悼み、ローリングス空軍大尉は NR C にちなんだサークル名をサンカラの名前を冠したものに改称している（しかし、政権交代後

に 2005 年にアコ・アジェイの名前を冠したものに改称されている)。1989 年には、地区レベルでの選挙を実施して議会在が設立された。1992 年 3 月には、言論の自由、法による統治、複数政党制をもちこんだ憲法草案が政府に提出され、4 月の国民投票で草案が可決された。1992 年 5 月には、政党活動が 10 年半ぶりに解禁となり、11 月には大統領選挙が実施された。いわゆるアフリカの民主化である。この前後の出来事で重要なのはローリングス空軍大尉によって 1992 年 7 月には共和国 32 周年記念式典が開催されたことである。また、クワメ・ンクルマ記念公園が創設され、その中心的なシンボルとしてンクルマ銅像が新しく建築された。さらに、ンクルマの遺骨がンクロフル村から移されて再々埋葬された。ローリングス空軍大尉はンクルマ主義及びパン・アフリカ思想をイデオロギーの根本原理にすえた。

1993 年 1 月に国民民主会議 (NDC) という政党を基盤にしてローリングスが大統領に就任した (第 4 共和制)。1996 年 12 月ローリングス大統領は再選され 2001 年 1 月まで政権を維持した。ローリングス政権で顕著な出来事は、クマシの科学技術大学の名称がクワメ・ンクルマの名前を冠したクワメ・ンクルマ科学技術大学に戻された。大学の正門入口にンクルマ銅像が建築された。また、1998 年にはクリントン米国大統領夫妻が訪問している。これを契機に、アフリカン・アメリカンサミット (1999 年) 奴隷交易の拠点ケープコースト、エルミナの観光計画や W・E・B・デュボイスセンターの設置がすすめられた。

2001 年 1 月には新愛国党 (NPP) のクフォーが大統領の候補者ジョン・エヴァンズ・アタ・ミルズ (ローリングス政権の副大統領) を破って大統領に就任した。クフォーはプシヤ政権の閣僚だった大臣秘書を経験しており反ンクルマの立場をとるきわめて鮮明な政治を行なった。2004 年 12 月にクフォー大統領は再選し 2009 年 1 月まで大統領の任期をつとめている。クフォー政権ではンクルマやダンクァという国民的英雄の二極化であったものを、ビッグ・シックスの他の 4 人も国民的英雄に祀りあげることで、都市のなかの街路にもこれらの英雄たちのモニュメント (銅像等) が創設され多核化したことがきわめて特徴的である。その周辺には歴史的な英雄たちの銅像も創設された。

2006 年 1 月にクフォー大統領がアフリカ連合 (AU) の議長に選ばれた。ンクルマに対する立場も親ンクルマとまではいかなくともパン・アフリカニズムとの関係で対応をせまられたようだ。2006 年 9 月にはンクルマの誕生日を「創始者の日」として国民の日に定めるようになった。また、2007 年 3 月にはガーナ独立 50 周年記念式典を指揮することになったのもクフォーである。式典後すぐに、クフォーは渡英してエリザベス女王に謁見している。ンクルマの紙幣のほかにビッグ・シックスの紙幣も発行された。ンクルマ夫人も国葬にされてンクルマ廟にンクルマと並ぶように埋葬された。この時期、中国の援助により、大統領府、国防省、国際劇場、ホテル等の建築ラッシュが進められた。2008 年にはブッシュ元大統領 (ジュニア) もガーナを訪問している (後の政権の時にブッシュを顕彰してブッシュ・ウォーカー高速道路が創設された)。2009 年 1 月にはローリングス大統領時の副大統領であったミルズが大統領に就任した。NDC を政党基盤とする政権に戻った。9 月には「頭部のない」ンクルマ銅像とその「頭部」がクワメ・ンクルマ聖廟に設置された。2012 年 1 月にはアフリカ連合の前庭にもンクルマ銅像が建築された。7 月にはミルズ大統領は再選される前に逝去しマハマ副大統領が大統領に就任した。オバマ大統領夫妻がケープコーストを訪問した。2012 年 12 月にマハマは NPP のアクフォ＝アドに僅差で大統領選挙に勝利した。大統領選挙をめぐって最高裁で長い係争が続いた。しかし、アクフォ＝アドも 2017 年 1 月に大統領に就任し、2017 年 3 月のガーナ独立 60 周年記念式典を実施している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 阿久津昌三	4. 巻 16
2. 論文標題 eALPSを活用した文化人類学の授業実践報告:世界の農作物と家畜	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育実践研究（信州大学教育学部附属次世代型学び研究センター）	6. 最初と最後の頁 69-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿久津昌三	4. 巻 18
2. 論文標題 eALPSを活用した文化人類学の授業実践報告:世界の指導者	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育実践研究（信州大学教育学部附属次世代型学び研究センター）	6. 最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿久津昌三	4. 巻 14
2. 論文標題 ガーナの独立記念式典の変容過程の事例を中心として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 信州大学教育学部研究論集	6. 最初と最後の頁 72-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 阿久津昌三
2. 発表標題 ガーナの独立記念式典の変容過程ー特に、Ghana@50とGhana@60の事例を中心として
3. 学会等名 日本アフリカ学会第55回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 阿久津昌三
2. 発表標題 中国のアフリカ攻勢とアフリカの狡知・智恵
3. 学会等名 日本アフリカ学会第54回学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 阿久津昌三
2. 発表標題 アフリカ諸国の独立記念式典 特に、ガーナ共和国の独立記念式典を中心として
3. 学会等名 2017年度三田社会学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shozo Akutsu
2. 発表標題 My Beloved Asante and Museums in Ghana
3. 学会等名 Workshop "The Museum as a Guardian of Cultural Heritage" at the Manhyia Palace Museum, Kumasi, Ghana
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 阿久津昌三
2. 発表標題 大統領の国葬 Kwame Nkrumahの埋葬、再埋葬、再々埋葬の事例を中心として
3. 学会等名 日本アフリカ学会第56回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿久津昌三
2. 発表標題 アフリカ諸国における独立60周年に向けて ガーナの独立記念式典の変容過程の事例を中心として
3. 学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿久津昌三
2. 発表標題 大統領の椅子 特に、ガーナ共和国における大統領のガバナンスと政権交代の事例を中心として
3. 学会等名 日本アフリカ学会第57回学術大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 阿久津昌三	4. 発行年 2017年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 4
3. 書名 「ガーナ共和国（アシャンティ族）」『世界の暦文化事典』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考